

劇場版 B L A C K R X × プリキュアオールスターズ × ポケットモ
ンスター ガメラ vs 宇宙海賊ザノン

CONAN

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私マサラタウンのラン、夏休みに光太郎お兄ちゃんとプリキュアのお姉ちゃん達と一緒に海水浴にきたら浜辺で重傷を負った巨大亀さんと出会ったの。これは私ランと子供の守護神と呼ばれたガメラの出会いと絆と別れの物語

目次

予告編	
予告編①	1
予告編②	3
本編	
シーン1 オープニング	6
シーン2 孤島でバカンス	9
シーン3 ランとガメラの出会い	16
シーン4 孤島の大決戦	21
シーン5 芽生え始める感情と三位一体攻撃	26
シーン6 昭和ライダーvsシヨツカー怪人軍団	32
シーン7 宇宙刑事と謎の新ライダー	38
シーン8 最強の刺客と復活のガメラ	43
シーン9 誕生！女神のプリキユア	46
シーン10 最後の決戦 放て！ランとガメラのZ技	52
シーン11 また会う日まで・・・	56
前日談・後日談・ディレクターカットシーン	
前日談	61
後日談	64
ディレクターカットシーン	68

予告編

予告編①

RX「リボルケイン」 RXはリボルケインをベルトから出し
ショッカー怪人に突き刺す。ショッカー怪人は火花を散らしながら
大爆発する。仮面ライダーBLACK RXとプリキュア達によつ
て次々と倒されるショッカー怪人。

ショッカー首領「おのれ仮面ライダーBLACK RX、おのれプ
リキュアの小娘どもめ」

痺れを切らしたショッカー首領は宇宙海賊ザノンに仮面ライダー
BLACK RXとプリキュア達の抹殺を依頼する。

宇宙海賊ザノン、ショッカーとは同盟を結んでおりこれまでいくつ
もの星を滅ぼしてきた。

ラン「ん？誰？」

光太郎とプリキュア達ともに海水浴に来てたランは不思議な声を
聞く。そこには巨大な亀が重傷を負って倒れていた。

ラン「あなた、大丈夫？」

巨大亀「！」

巨大亀は自分を見ても怖がらない少女に戸惑う。

ラン「光太郎お兄ちゃん、あつちで大きな亀さんが大怪我している
手当てして」

光太郎「わかった、さそつく手当てしよう」

プリキュア達「いや大きすぎるでしょう」

巨大亀を見ても普通にたようする光太郎とランに思わずツツコミ
をしてしまうプリキュア達そんな中、宇宙海賊ザノンがつい地球に現
れた。宇宙海賊ザノンによって次々と送られる怪獣達。

ブラック「なにこの強さありえない」

ホワイト「ジャークキングやショッカー怪人よりもはるかに強い」

宇宙海賊ザノンの怪獣達に苦戦するRXとプリキュア達絶体絶命
のそのとき巨大な炎が怪獣に命中。

ラン「え？」

巨大亀『大丈夫か？』

ラン「亀さん」

巨大亀『ガメラ』

ラン「え？」

ガメラ『俺の名はガメラ、助けられたお礼がしたい』

そういつて怪獣と戦い始める。

ガメラ『この地球はガメラと』プリキュア達「プリキュアと」

RX「仮面ライダーが」

プリキュア・RX・ガメラ「『守って見せる』」

そして現れる1000体のショッカー怪人。

???'「こいつらは俺達に任せろ！」

RX「あなた達は先輩のみなさん」

1号「光太郎、こいつら我々が引き受けよ」

2号「君は早くガメラのもとへ」

昭和ライダーも登場する超スペクタクル長編『劇場版BLACK

RX×プリキュアオールスターズ×ポケットモンスター ガメラv

s宇宙海賊ザノン』

ピース「ピカピカピカリン ジャンケンポン(?) キュアピース」

バルタン星人『いけい分身共プリキュアを倒せ』

分身1『・・・』

分身2『・・・』

バルタン星人『どうした？』

分身全員『ジャンケンに負けた』

ラン「わくくん私も負けた(T△T)」

リザードン『くそこの俺がプリキュアの小娘ごときに(怒)』

ピカチュウ『何しての2人とも(汗)』

ジユカイン・ゲッコウガ『あははは・・・(苦笑)』

近日公開

予告編②

宇宙から地球侵略をもくろみ宇宙海賊がやってきた。

ザノン『やれ〜地球人を八つ裂きにしろ』

バルタン『俺はバルタン星人、やれ分身どもライダーとプリキュアどもを片付けろ!』

ピース「ピカピカピカリン ジャンケンポン(??)キュアピース」

バルタン・分身『ジャンケンに負けた(涙)』

ラン「わ〜ん 私も負けた(〸〸)」

マサト「なにしてのラン(汗)」

ピカチュウ『ははは(苦笑)』

次々と送れる怪獣達

ブラック「何、これ大きいすぎるでしょう」

ホワイト「まるで攻撃が効いていない」

ブロサツム「絶体絶命です」

怪獣をみやげるラン。

ラン「・・・カツコイイ(☆▽☆)」

ロゼッタ「たくさん食べて大きくなれたんですね(〸〸)」

プリキュア達「少しは驚きなさい(怒)」

そして怪獣達に火の玉が命中する

ラン「え?」

ガメラ『大丈夫か?』

ラン『ガメラ!』

ガメラ『助けられたお礼がしたい』

現れたのは子供の守護神ガメラ

ガメラ『子供達の未来を守る為』

ブラック「みんなの笑顔を守る為」

RX「人間の自由と平和を守る為」

RX・ガメラ・ブラック『この星を守る為に戦うそれが仮面ライダー』

(ガメラ)(プリキュア)だ(よ)』

そして

1号「我々もともに戦うぞ！」

昭和ライダーも参戦さらに

???「俺達も」

???「一緒に戦うぜ！」

ラン「誰？」

ゼロ「俺は仮面ライダーゼロ」

レオ「俺は仮面ライダーレオ」

謎のライダー登場さらに

ギャバン「宇宙刑事ギャバン！」

ザノンを追ってあの伝説の宇宙刑事も登場！

そしてランを庇い倒れるガメラ

ラン「私はいつも守られてばかりもう私の目の前で誰かが傷つくのをみたくないだから今度は私がみんなを守って見せる」

マサト（妖精）「だったら力を貸すよラン」

ラン「マサト・うん！」

そう言つて2人は拳を合わせる。するとランの体は光に包まれ白いコスチュームを身につけたプリキュアに変わる

ミュウ「みんなを見守り 未来を導く 女神のプリキュア キュアミュウ！」

ピカチュウ『ランが』

リザードン『プリキュアに』

ジュカイン『変身』

ゲッコウガ『したでござる』

ランがプリキュアに変身する超スペクトル長編。

『劇場版BLACK RX×プリキュアオールスターズ×ポケットモンスター ガメラvs宇宙海賊ザノン』

ラン「いくよ！ガメラ！」

ガメラ『ああ！』

ラン「火炎噴射よりも」

ガメラ『強いプラズマ火球！』

ラン「プラズマ火球よりもさらに強い私達の」

ラン・ガメラ 「『超全力のZ技』」

ラン・ガメラ 「『いけ〜〜〜』」

2人は宇宙海賊ザノンに目掛けZ技を放つ。

こうご期待!

本編

シーン1 オープニング

『仮面ライダー・・・プリキュアこの星を守る正義の味方』

『街に』ザケンナーと背中合わせに戦うマックスハートとスプツラシユスター

『空に』コワイナーと空中戦をするプリキュア5とフツレシユ

『海に』ネガトーンと浜辺で戦うハートキャッチとスイート

『山に』岩地でアカンベエと戦うスマイルとドキドキとハピネス
チャージ

『この星を守るために戦い続けている』

荒れ地でショッカー怪人と戦うRX

『仮面ライダー・・・プリキュアこの星を守る正義の味方』

リボルケンインでショッカー怪人を切り裂き倒すRX

『そしてこの少女ラン、ポケモンの世界でショッカーに襲われた所を
アルセウスに助けられプリキュアの世界に保護された。』

ピカチュウを肩に乗せ走るラン。

『仮面ライダー・プリキュアともにショッカーと戦っている』

ランは港にあるクルーザーにピカチュウとともに乗り光太郎とプリキュアに早くきてと呼び掛ける。

『出会った数だけ仲間がいる』

クルーザーから海を眺めるランと隣にいるユリーカとマサトも一緒に眺める。その様子を光太郎とプリキュアとタケシとシトロンが暖かく見つめる。

『仲間の数だけ友情が待っている仮面ライダーとプリキュアの戦いは
続く、続いたつら続く』

ラン達を乗せたクルーザーの目の前に目的地の孤島が見えてくる。

『そして遙か宇宙の彼方から新たな敵が地球に向かっていった』

。。。宇宙空間。。。

地球を目指して一隻の戦艦が迫っていた。そうこの戦艦は宇宙海

賊ザノン。シヨツカーとは同盟を結んでおり仮面ライダー・プリキュア抹殺をシヨツカーに依頼され地球に向かっていった。

ザノン「あれが地球かよし早速怪獣を送りこんで仮面ライダーとプリキュアとやらを血祭りにしてやる」

「ウー！ウー！《警報》」

ザノン「なんだこの警報は？」

するとザノンの目の前に巨大亀が回転しながらこちらに向かっていった。

ザノン「あんな報告は受けていない。だが敵なら倒すまでだ！行け！ベムスター」

ザノンから宇宙怪獣ベムスターが現れた。巨大亀は甲羅から手と顔を出し戦闘態勢に入った。

ベムスター「バカな奴だザノン様に刃向かうとは」

巨大亀「海賊の飼い犬になっている奴にとやかく言われる筋合いはない」

ベムスター「なんだとこれでも食らえば！」

ベムスターは頭の角から光線を放った。しかし巨大亀は甲羅で反射して跳ね返した。

ベムスター「ぎやあああ」

巨大亀「こいつで止めだ火炎噴射！」

巨大亀は口から火炎噴射を出してベムスターを焼き付くした。

巨大亀「ぎつとこんなものだぜ・グハッ」

ベムスターを倒した巨大亀だったがザノンのレーザーの不意討ちをくらい右肩を貫通してしまう。そして巨大亀はそのまま地球に落下する。

ザノン「行け！バルタン星人あの巨大亀を始末しライダーとプリキュアを倒せ！」

ザノンに送り込まれたバルタンはそのまま地球にむかった。

???「ザノンを追ってきたらまさか別の世界の地球に来てしまうとはだがたとえ別の世界でも地球は俺の故郷守って見せる、まずはザノンにやられた巨大亀とザノンが狙ってる仮面ライダーとプリキュアを

探すか！」

ザノンを追って謎の宇宙船も地球に向かった。今、地球に最大の危機が訪れようとしていた。

シーン2 孤島でバカンス

シヨツカーと戦う仮面ライダーBLACK RX南光太郎とプリキユアそしてランとピカチュウ達、今は孤島で海水浴にきてのんびりしていた。

ラン「まて〜ユリーカ」

ユリーカ「えへーランこつち、こつち」

つぼみ「タケシさんこれはここにおけばいいですか？

タケシ「ああ、そこに置いてくれ」

なぎさ「お待たせ♪」

ラン「わあくなぎさお姉ちゃん達水着可愛い」

ほのか「ありがとうランちゃん♪」

タケシ「ウオオオなんて美しいんだ！(??O??)」

ラブ「そんな／＼／＼／＼」

美希「美しいだなんて／＼／＼／＼」

せつな「照れちやいます／＼／＼／＼」

ひめ・えりか「うん、うん／＼／＼／＼」

タケシ「ゆりさんやっぱりあなたはなにをきても美しい他のみんなとくらべればまさに月とスッポンだ(??O??)」

プリキユア達「おい！こら(怒)」

タケシ「ぜひこのあと自分と『グサ！』・・・シビ・・・レビ・・・ビレ・・・Σ(？□——)」

ひめ「ナイス♪グレッグル」

えりか「よくやったわ♪」

タケシはゆりだけの水着をほめ他のみんなの水着を侮辱してグレッグルに毒づきの制裁を受けてしまう。

リザードン『相変わらずだなタケシ』

ラン「よし！シトロロンバトルしょー！」

シトロロン「わかりました、お相手いたしましたしょう」

ラン「光太郎お兄ちゃん審判お願い！」

光太郎「わかった」

光太郎「ではこれよりマサラタウンのランとミアレシティジムリーダーシトロンのポケモンバトルを始める使用ポケモンは一体2人も準備はいいか？」

ラン・シトロン「もちろん」

シトロン「いきます、出てきてくださいホルビー」

シトロンはホルビーを出した。

つぼみ「あのポケモンは？」

タケシ「ホルビーと言ってノーマルタイプのポケモンだ！」

なぎさ「タケシさんΣ（。ロ。）」

ほのか「いつの間にΣ（。ロ。）」

エレン「復活はやつΣ（。ロ。）」

ラン「よー！ー！しくよ！ピカチュウ、君にきめた！」

ピカチュウ『まかせてラン！』

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

OPテーマ【未来コネクション】

向き合うピカチュウとホルビー

ピカチュウにでんこうせっかの指示をするラン

ホルビーにかわす指示をするシトロン、ホルビーはジャンプしてかわすがランはすかさずエレキボールを指示する。

みごとホルビーに命中する。喜ぶランとピカチュウ

2人のバトルを見守るプリキュア達、気球からラン達を監視するロケット団ランはでんこうせっかを再び指示するそしてジャンプしてアイアンテールを指示する。

ホルビーはアイアンテールを耳でガードする。そのことに驚くランとピカチュウ。

耳でガードをしたことにふつと笑うシトロン。しかしランはそのまま10万ボルトを指示する。

同じ頃傷を負った巨大亀が空から墜ちてくる。そしてロケット団の気球にぶつかる。

10万ボルトをもろに浴びたホルビーはフラフラする。

ピカチュウはホルビーから距離をとる。

ランのいる島にめがけて墜落する巨大亀。

ランとピカチュウは電気のZ技のポーズとりスパークキングギガボルトをうつ！

スパークキングギガボルトはホルビーに命中し大爆破が起こす同時に巨大亀が島に墜落する。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

ホルビー『(×O×)』

光太郎「ホルビー戦闘不能よつてこのバトルマサラタウンのランの勝ち！」

ラン「やった〜やったよピカチュウ(〇〇)」

ピカチュウ『うん♪』

つぼみ「すごいですね、ランちゃんとピカチュウ♪」

いつき「そうだね、私も少しポケモンバトルに興味持ったかな」

ゆり「そうね私もやってみたいわ」

タケシ「ウオオオゆりさん(??O??)」

つぼみ・いつき「(?O?)」

タケシ「ポケモンバトルに興味を持たれたのなら自分が手とり足とりバトルを教え『グサ!』・・・シビ・・・レビ・・・ビレ(□□□□)」

グレッグル『ケツ・・・』

えりか「こりてないねタケシさん(?O?;)」

プリキュア達「うん(?O?;)」

ラン「お姉ちゃん達おまたせ(〇〇)」

なぎさ「ランちゃん、水着に着替え終わっΣ(。ロ。」

ほのか「どうしたの?なぎさΣ(。ロ。」

プリキュア達「!!!Σ(。ロ。」

プリキュア達の前に水着に着替えおえたランがやってきた。しかし7歳とは思えないスタイルの良さに全員驚いてしまう。

マサト・誠司・奏太「Σ(。ロ。」

ユリーカ「(〇〇)♪」

光太郎「ランちゃんその水着は(汗)」

ラン「ピンクのお姉ちゃんから貰ったの。なんでも私のママ(女神)が子供の時きてた水着だつて」

ピカチュウ『子供の時で・・・(汗)』

テールナー『どんなスタイルだったのよ、ランのもう一人のママ(汗)』

マサト「／／／／／／／」

ランの着ている水着はピンク色のビキニで肌が最大限まで増出されランのスタイルが最大限にいかされてる水着だった。

ユリーカ「(そうだ！ニヒヒ) ねえマサトちよつとランの目の前に立って(ゝ〇ゝ)」

マサト「え？いいけど」

ラン「あれ？マサトどうしたの？なんで私の目の前に立っての？」
ランは突然自分の目の前に立つマサトをジッと見つめる

マサト「あ、いや、その(ひいゝランが僕の目の前にしかもジッと見ているすぐくドキドキする／／／／／／／)」

ユリーカ「(よし♪よし♪効果抜群ね、じゃあもうひとおししますか)ラン、ちよつとジャンプしてくれる(ゝ〇ゝ)」

ラン「え？いいけど？せゝのえい！」

ボヨン！ 《胸が揺れる音》

マサト「!!!」

ユリーカ「うん♪もつとジャンプして(ゝ〇ゝ)」

ラン「うんいいけど？えい！」

ボヨン！

ボヨン！

ボヨン！

マサト「(もう勘弁して／／／／／／／)」

ボヨン！

ボヨン！

プチン！ 《水着の紐が外れる音》

アコ「見てないの? (・|・)」

誠司「いや見てねえて (汗)」

奏太「そうだぜ (汗)」

シトロ「そうですね (汗)」

ユリーカ「ふふふ、それで見た感想は? (〇〇)」

シトロ「きれいなピンク色でした」

誠司「とても柔らかかったです」

奏太「マサトが羨ましいと思いました」

ユリーカ「3人とも正直者ね (・|・)」

誠司「いや、今のはちがうだ (汗) ハツ。(。口。)!」

奏太「そうだぜ (汗) ちがうぜ、ハツ。(。口。)!」

めぐみ「誠司 (笑怒)」

アコ「奏太 (笑怒)」

誠司「待て誤解だ怒るなめぐみ (汗)」

奏太「そうだぜアコ (汗)」

めぐみ・アコ「何言つての? 私達全然怒っていないじゃない笑顔だし (笑怒)」

奏太・誠司「いや無茶苦茶怒ってるだろ! その笑顔怖いし (汗)」

ひめ「誠司たつらめぐみがいながら何してのよでもめぐみの今の笑顔まじ怖い (汗)」

響「今のアコの笑顔無茶苦茶怖いね (汗)」

奏・エレン「うん (汗)」

奏「ところでユリーカちゃん1つ聞いてもいい?」

ユリーカ「何?」

奏「マサト君でランちゃんが好きなの?」

ユリーカ「うんそうだよ、初めて会った時に一目惚れしたみたいでも本人は自覚無いみたい」

エレン「え? そうなの?」

ユリーカ「でもこの間の出来事 (本編9話参照) で少しずつ意識しだした見たい」

響「ランちゃんのほうはマサトのこと好きなの?」

ユリーカ「それはわからないけど何か切っ掛けがあればランも異性
ていうの理解すると思う」

エレン「なるほでね、つまりあとは本人次第でことね」

ユリーカ「うん」

こうして楽しいバカンスをプリキュア達と楽しむランだった。

シーン3 ランとガメラの出会い

―― 孤島西側 ー

巨大亀『いてて、思ったより傷が深い、この状態じゃ動けないさ
てどうしたらいいか』

―― 孤島東側 ー

ピカチュウ『!』

ラン「え? 誰?」

ひかり「どうかしたランちゃん」

ラン「あっちのほうで声が聞こえたの、私、ちよつと見てくる」

そう言つてランは声が聞こえた西側に向かった。

つぼみ「ちよつとランちゃん、しょうがないですね。えりか、私は

ランちゃんを追いかけます」

マナ「なら私も行くわ」

やよい「私も!」

そう言つてつぼみ、マナ、やよいもランのあとを追つた。

―― 孤島西側 ー

ラン「確かこつちから聞こえたけど、あ!」

ランは声が聞こえた西側にやつてきたすると何かを見つけたみたいだ。

巨大亀『ん? 誰かきた! 子供だと!』

ラン「え? あなた、怪我してるの? 大丈夫?」

巨大亀『いや確かに怪我はしてるけど君は俺を見ても驚かないのか
い?』

ラン『へ? 何で? あなた大きい亀さんでしょう?』

巨大亀『いや大きい亀て間違つてはいないけどこの子いろいろず
れてるみたいだな(汗)』

ラン「ピカチュウ、光太郎お兄ちゃん呼んできてこの巨大亀さんを
手当てしたい」

ピカチュウ『わかった待つてね』

ピカチュウは光太郎を呼びに行った。

巨大亀『なんかもう驚く気にならない(汗)』

ランの天然な行動にさすが疲れたか巨大亀は驚く気無くす。

つぼみ・マナ・やよい「「ランちゃん」」

ラン「あ！お姉ちゃん達こっちだよ」

つぼみ「全くピカチュウが一緒でも1人で行動したら危なΣ(。ロ。ロ。」

マナ「どうかしたの？つぼみちやΣ(。ロ。」

やよい「2人ともどうしたの突然固まっΣ(。ロ。」

ランを探しに西側にきたつぼみ達が見たのは身長60メートルはある巨大亀だった。

ラン「お姉ちゃん達大変なのこの巨大亀さん怪我してるの」

その時

ギョングン 《光弾音》

巨大亀『危ない！』

ラン「え？」

ドカーーーーン 《爆発音》

つぼみ・マナ・やよい「「ランちゃん！」」

突然どこからか光弾が飛んできてあたり爆発する。そして煙がはれる。

ラン「あれ？なんともない？あ！巨大亀さん」

巨大亀『大丈夫か？うぐ！(＞「＜”』

ラン「巨大亀さん」

巨大亀は光弾の攻撃からとつさに右手の甲でランを守った。

つぼみ「あの巨大亀さんランちゃんをかばって手の甲を怪我しました」

???『ふん、バカな奴だ手負い状態でガキを庇うなんて』

つぼみ「誰ですか？」

バルタン『俺はバルタン星人、宇宙海賊ザノン様の命令でその巨大亀を始末しにきた』

マナ「ふぎけないで怪我をしてる巨大亀さんを始末しようとするなんて」

つぼみ「あなたのようなかたは許しません」

バルタン『だったらどうするんだ？』

やよい「あんたなんか私達が倒してやるから」

バルタン『俺を倒すだと良いだろう少し遊んでやる』

そう言うバルタンは分身を出した。

ラン「え？増えちゃた」

巨大亀『奴は宇宙忍者と呼ばれている気を付けろ』

つぼみ「あれ？巨大亀さんは私達が戦うのを驚かないですか？」

巨大亀『この子に会ってすぐわかったお前らが女神ピンクが言つてたプリキュアだろ？』

マナ「ピンク様と知り合いなの？」

巨大亀『ああ、それにこの子が言つてた光太郎と言うの仮面ライダーだな？』

やよい「仮面ライダーも知っているの？」

マナ「とにかく2人ともいくよ」

やよい・つぼみ「うん（はい）」

つぼみ「プリキュアオープンマイハート」

つぼみの体は光包まれキュアブロッサムに変わる。

ブロッサム「大地に咲く一輪の花 キュアブロッサム」

やよい「プリキュアスマイルチャージ」

やよいの体光に包まれキュアピースに変わる。

ピース「ピカピカピカリン ジャンケンポン (??) キュアピース」

マナ「プリキュアラブリंक」

シャルル「L・O・I・V・E」

マナの体は光包まれキュアハートに変わる。

ハート「みなぎる愛 キュアハート」

巨大亀『あれがプリキュアか』

ハート「愛を無くした悲しい宇宙忍者さんこのキュアハートがあなたのドキドキ取り戻して見せる」

バルタン・分身『『『『』』』』』

ブロッサム「どうしたのでしょうか？なんか様子が変です」

バルタン・分身『『『負けた!』』』』

ハート「へ?」

ブロツサム「へ?」

ピース「へ?」

バルタン・分身『『『ジャンケンに負けた~~~~~(V) T? T

(V)』』』

ブロツサム「ジャンケンに負けたて(汗)」

ラン「わ~ん私も負けた! (>|<)」

巨大亀『おい、おい、バルタン(バカ)はいいけど君もジャンケンしたのか(汗)』

ブロツサム「なんだかわからないけどチャンスですね。手負い状態の巨大亀さんを始末しようとしただけでなくランちゃんも危険な目に遭わすなんて私、堪忍袋の緒が切れました」

ピース「いくよ!プリキュアピースサンダー!」

ブロツサム「花よ輝け!プリキュアピンクフォルテウェイブ!」

ハート「あなたに届けマイスイートハート!」

ブロツサムとピースの技で分身は消滅した。そしてハートと技は本体に命中する。

バルタン『ギヤアアア俺の出番はもう終わりなの?まだ一度フォオフォオの台詞すら言っていないのにこんなジャンケンに負けて落ち込んで技を食らう間抜けな殺られかたするのか?…:ラ~ブ!…:ラ~ブ! (V) (V)』

色々と言いたいこと言っつてバルタンは浄化された。

ブロツサム「なんか色々言っつてましたね(汗)」

ピース「もうしかして悪いことしちゃた(汗)」

巨大亀『気にするな相手がバカだったただけ』

ハート「ありがとう巨大亀さん」

光太郎「お~い」

ラン「あ!光太郎お兄ちゃん」

光太郎「この巨大亀だね怪我をしているのは?」

ラン「うん、そうだよ」

その後光太郎によって巨大亀は手当てを受けた。

光太郎「よし！これで応急処置はすんだ！」

巨大亀『すまねえ』

光太郎「そう言えばランちゃん？」

ピカチュウ『シー、寝ちやたよ』

ラン「スー、スー（――）zzz」

つぼみ「今日はいっぱい遊びましたからね」

光太郎達は近くの岩に持たれて寝るランを静か見守った。

ユリーカ「あ！見てマサト」

マサト「やつぱり巨大亀でガメラだった」

マナ「ガメラ？」

ガメラ『君達はあの時の』

ピカチュウ『2人とも知っているの？』

ユリーカ「うん、私達がこの世界にきた時に迷子になったことが

あってその時ガメラが私達を妖精学校まで連れて行ってくれたの」

マナ「なるほどつまりガメラはランちゃんの友達の恩人なんだ」

ガメラ『君達が言っていた友達でこの子のことだったのか』

光太郎「取り合えずガメラ今日はゆっくり休むといい」

ガメラ『ああ、そうするよ』

そしてその日は光太郎達は孤島のペンションに戻った。次の日ガメラの姿はなかった。

シーン4 孤島の大決戦

ラン「カメラ・・・それが巨大亀さんの名前なの」

ユリーカ「うん！そうだよ、前に私とマサトも助けて貰ったんだ」
ラン「でもどこへいったのかな？」

めぐみ「大丈夫また会えるよ。そうだ！今日は皆でカヌーを乗りに行こう」

ユリーカ「うん！そうだよ」

めぐみ「ほら！誠司も」

誠司「ああ、そうだな」

ユリーカ「何ならカヌー2つレンタルするそうすれば誠司と2人きりだよ」

めぐみ「ちよ、ユリーカちゃん／／／／／」

ユリーカ「(ふふ、この反応、セレナを思い出すな)(〇〇)」

ラン「ははは、めぐみお姉ちゃん、セレナみたい(〇〇)」

ユリーカ「あ！マサトはランと2人きりでのる？」

マサト「ユリーカ／／／／／」

ラン「え？マサト私と2人で乗りたいの？」

ユリーカ「そうだよ、あ！そうだマサト耳貸して」

マサト「何？／／／／／」

ユリーカ「(2人きりになればランとイチヤイチャできるよ)」

マサト「(イチヤイチャで別に僕とランはそんな関係じゃない／／／／／)」

ユリーカ「(何言ってるの？マサトはランを責任持ってお嫁さんに貰ってあげなきゃいけないのよ)」

マサト「お嫁さん／／／／／」

ラン「へ？」

めぐみ「は？」

誠司「は？」

マサト「いやなんでもない(どう言うことだよ、責任とお嫁さんにて?)／／／／／」

ユリーカ「(だってマサト二回もランの裸を見たじゃないこれじゃ責任とらないと行かないでしょう? まあ二回目は上半身裸だけ)」

マサト「確かに見たけど二回目はユリーカが原因でしょう?」
／／／／

ユリーカ「(そう言えばそうね) テへ (〇〇)」

ラン「ねえ早くカヌー乗りに行こう」

ユリーカ「わかった今いくよ、ほら! マサトいくよ」

マサト「うん／／／／」

ラン「マサトどうしたの? 顔赤いよ大丈夫?」

マサト「うん大丈夫だよ／／／／」

めぐみ「マサトくん完全にユリーカちゃんに遊ばれてるね (汗)」

誠司「ああ、そうだな (汗)」

こうしてラン達はカヌーを借りに行った。

「……海……」

ラン「わあくすごい」

ユリーカ「そうだねラン」

めぐみ「いい景色ね誠司」

誠司「ああ、そうだな」

マサト(妖精)「あの1ついい? この状態何?」
／／／／

ユリーカ「しょうがないでしょう。カヌー4人乗りだから私かマサトのどつちかが妖精にならないと乗れなかっただし」現在ラン達はカヌーに乗っているが4人乗りのためマサトは現在妖精になってランに抱っこされていた。

ラン「大丈夫だよマサト、カヌーから落ちないように私がしっかり抱っこするから」

そう言つてマサトを強く抱きしめた。

ムギユ

マサト(妖精)「(ランの胸が背中に靴っいている／／／／)」

そんなやり取りをしているラン達に怪しげな影が近づいていた。

誠司「おい、あれなんだ?」

めぐみ「え？何？キヤア！」

誠司「めぐみ大丈夫か？」

ラン「キヤア、いてて、すごい揺れだった．．あ！マサト大丈夫」
マサト（妖精）「はい大丈夫です（??O??）」

ラン「あれ？どうしたの？マサト？」突然カヌーが揺れめぐみは誠司に抱き止められ、ランはそのまま転んでしまう。そしてマサトはランの胸の下敷きになった為か目が？になってしまう。

ユリーカ「もうこんな時にしつかりしなさいエロ妖精！（怒）」

ラン「あ！あれ見て！」

ランが指を指した方角に巨大なエビの怪獣がいた。

めぐみ「もうしかして昨日の奴の奴の仲間とにかくやるしかない誠司、

ランちゃん達をお願い」

誠司「わかった！めぐみ気を付けて行けよ」

めぐみ「うん」

めぐみはプリチェンミラーを取りだす。

めぐみ「プリキュアくるりんミラーチェンジ！」

めぐみの体は光に包まれキュアラブリーに変わる。

ラブリー「世界に届けたいビッグな愛 キュアラブリー！」

ラブリー「いくよラブリーパンチングパンチ」

ラブリーは巨大エビにパンチングパンチを放った。

ラブリー「え？」

しかし巨大エビは傷一つついていなかった。

巨大エビ『この程度でこのエビラ様を倒そうとはな』

ラブリー「まだよ！ラブリーライジングソード！」

ラブリーらライジングソードを出してエビラに切り掛かるしかし。

ドカ！

ラブリー「きゃあ！」

誠司「ラブリー！」

エビラはハサミで近くの岩にラブリーを叩きつけた。叩きつけたられたラブリーはそのまま気絶した。そしてエビラは気絶したラブリーに接近する。

エビラ『ふん！ちょうど、腹が減っていたんだ！人間の若い娘の肉は特にうまいからな』

誠司「まずい！ラブリー逃げろ！」

エビラ『心配するなすぐに会わせてやる俺の胃袋の中だな！』

エビラがラブリーに近づこうとしたその時。

ロボ「ボルテイクシューター」

ビュンビュン

エビラ『ぐあ！誰だ？』

そこには海を泳ぐガメラとガメラの甲羅の上にいるロボライダーだった。

ロボ「俺は悲しみの王子　RX　ロボ・ライダー！」

エビラ「くそ！小賢しい真似を」

ロボ「俺は援護するガメラは奴を倒せ！」

ガメラ『わかった』

ラン「ガメラ」

ガメラ『大丈夫かランだったな？』

ラン「うん！」

ガメラ『この子には助けられた恩がある。指一本触れさせない』

ロボ「ライドロン！」

ロボライダーがライドロンを呼んだ。

ロボ「ライドロン、ランちゃん達を保護するだ」

ライドロン『了解』

ライドロンは気絶したラブリーを回収するとカヌー乗ったラン達のもとに向かった。

エビラ『そうか！お前がザノン様が言っていた奴か！ならここで倒すまでだ！』

ガメラ『ふん！やれるもんならやってみろ！すぐにエビフライにしてやる』

エビラはハサミでガメラ目掛け攻撃した。だがガメラエビラのハサミに噛みついた。

エビラ『いででで！離しやがれ亀野郎！』

ガメラ 『離してやるよ!』
ブチ!

エビラ 『ぎゃあああ』

ガメラはエビラのハサミを食い千切った。

ガメラ 『これでお得意のハサミは無くなったぜ!』

エビラ 『なめんなよ!』

R X 『リボルケンイン!』

エビラが腕を千切られ怯んだ隙にR Xに変わりリボルクラッシュをエビラの腹に突き刺した。

エビラ 『ぐあ!』

R X 『今だガメラ!』

ガメラ 『いくぜプラズマ火球!』

R Xがリボルクラッシュでエビラの動きを止めている隙にガメラはプラズマ火球をエビラに放った。

エビラ 『ギヤアアア』

エビラは大爆発した。

ガメラ 『ふう、終わったな』

ラン 『ガメラ大丈夫?』

ガメラ 『ああ、大丈夫だ・・・あぶない!』

ラン 『え?』

その時ランに向かって巨大な火の玉がとんできた。そして・・・ドカーーーーン!

ガメラ 『ガハッ!』

そこにはランを庇って火の玉を受け重症のガメラがいた。そしてそのまま倒れ海に落ちた。

ラン 『ガメラ・・・いやーーーーー (涙)』

??? 『・・・』

ランの叫びが海に木霊してショックで気絶した。そして謎の怪獣が上空から様子を見て何処かへ飛び去った。

シーン5 芽生え始める感情と三位一体攻撃

ー孤島ペンションー

光太郎「ランちゃんは？」

なぎさ「泣き疲れて寝ちゃいました」

ゲッコウガ『無理ないでござる、自分を庇ってガメラ殿があのよう
なことに』

光太郎「ガメラは？」

ありす「海を捜索しましたが見つかりませんでした」

リザードン『おそらく死んではないと思う』

れいか「どうしてそう思うのですか？」

リザードン『あいつは強い！これくらいでくたばる奴じゃない』

ピカチュウ『うん！僕もそう思う！それにガメラ絶対復活すると思
う』

プリキユア達「え？」

ピカチュウ『何故ならガメラは宇宙海賊ザノンを絶対許さないか
ら』

生死不明のガメラだったがピカチュウ達は必ず自分達の前に現れ
るとプリキユア達に宣言するのだった。

ジユカイン『だから早くランの奴に元気になってもうらわないと
な』

ピカチュウ『ランのことはマサト達に任せよう』

ー個室ー

ラン「――」 z z z

ユリーカ「ラン・・・」

マサト「またランを悲しませてしまった。これじゃあシヨツカーに
襲われた時と同じだよ」

ユリーカ「ねえ、お兄ちゃんガメラ無事かな？」

シトロン「解りません。でも僕達に今できるのはガメラの無事を祈
ることくらいです」

タケシ「ああ、そうだな。それにサトシがもしこの場に居ればきつ

と『ガメラが生きていること信じる!』て言うと思うぞ」

ユリーカ「そうだねありがとう! タケシ、お兄ちゃん! あれ? マサトどうしたの?」

マサト「ユリーカ、僕まだ自分がランに対してユリーカが言っているような気持ちがあるかはわからない! でも今回のことでハッキリ解ったことがある。それは僕にとってランは大切な存在だて」
だからランが泣くのをるのが物凄く辛い」

タケシ「それならランが目を覚ましたら自分の気持ちを伝えてやれ」

マサト「タケシ・・・うん! わかった!」

ラン「う・・・うん、ここは?」

ユリーカ「ランよかった気が付いただね」

ラン「ユリーカ・・・マサト・・・タケシ・・・シトロン」

タケシ「俺は何か食べ物を作ってくる」

シトロン「それなら僕は光太郎さんに知らせてきます」

ユリーカ「じゃあ私はプリキュアの皆にこのことを伝えてくるからマサト、ランをお願いね」

マサト「わかったまかせて」

そう言つてタケシ達は部屋から出た。

シトロン「ラン、大丈夫でしょうか?」

タケシ「大丈夫だ! マサトがいる。あいつは俺と一緒に旅してた頃、何度も落ち込むランを元気にしたことがある」

ユリーカ「うん、そうだね。それにこれを切っ掛けにランが異性と言うのを少しでも理解してくればいいけど出ないとマサトの身が持たないよ」

タケシ「そうだなまた昨日見たいなことが起こると確かにマサトの身が持たないな。早くランに異性を理解して貰わないとな」

ランのことをマサトにまかせることにしたタケシ達は光太郎達に報告に向かった。

ラン「ごめん、色々心配かけて」

マサト「いいんだよ」

ラン「・・・ねえガメラは？」

マサト「生死不明だつて」

ラン「そう・・・ガメラ大丈夫かな？・・・もしなにかあったら私・・・
(涙)」

マサト「ラン泣きたい時は泣いて良いんだよ、僕は落ち込むランより元気なランのほう好きだ。それに泣けばきつと気持ちさがスツキリすると思うよ」

ラン「マサト・・・私怖かった・・・またあの時みたいになるじゃないかて・・・ガメラが私を庇った時に・・・私・・・私・・・うわあああん(泣)」
そう言つてランはマサトに抱き付いて思いつきり泣いた。

マサト「大丈夫だよラン！ガメラを信じて絶対無事だと信じて僕はランの笑顔が大好きだから早く元気だして」

ラン「ありがとうマサト(あなたはいつも私を元気にしてくれる。何だろうこの気持ちマサトを思うと胸がドキドキするこの気持ちなんなのかな?)」

マサト「どうかしたラン？(僕はまだ自分の気持ちに答えが出せないでも必ず答えを見つけて見せる)」

マサトによつてもとの元気を取り戻したランの心に僅かに何か芽生え始める。そしてマサトも自分の気持ちの答えを見つけることを誓うのだった。

ドカーーーーー

ラン「え？何今の音」

ユリーカ「ラン、マサト」

マサト「ユリーカ、今の音何？」

ユリーカ「新しい怪獣があらわれたの」

ラン・マサト「「え？」」

ーーーー孤島西側ーーーー

リザードン『かえんほうしゃ』

ジユカイン『リーフストーム』

ゲッコウガ『水手裏剣』

ポケモン達はそれぞれの技を怪獣に向けて放った。だが怪獣はビクともしていなかった。

リザードン『くそく全然聞いていない』

シトロロン『どうしたのでしょうか？リザードン達いつもより技の威力が低い』

タケシ「おそろくランがないせいでもの力が出せないだ。ランはサトシのポケモンとは特別な絆があるからな彼女がいたから今までいつも以上の力が出せたんだろう」

ブロサツム「そう言えば今までポケモン達はランちゃんがいた時に物凄い力を発揮してました」

ラン「みんなく」

プリキュア達「ランちゃん」

ポケモン達『ラン』

ピカチュウ『ランもう大丈夫なの？』

ラン「うん！マサトのおかげね」

リザードン『話はあとだ！』

ジユカイン『行けるか！』

ラン「もちろん！あの怪獣さんに見せて上げよう私達の本当の力を」

リザードン『よし！乗れラン！』

ラン「わかったいくよピカチュウ！」

ピカチュウ『了解』

ランはピカチュウを肩に乗せるとリザードンの背中に乗った。

ラン「いくよ！みんなまずはジユカイン、メガシンカ」

ジユカイン『おう！』

ランはZリングのキーストーンは虹色の光がジユカインのメガストーンに反応してジユカインをメガジユカインにメガシンカさせた。

ラン「次はゲッコウガ！」

ゲッコウガ『了解でござる』

ゲッコウガはそう言うのと回りに水柱が上がり消えるとサトシゲツ

コウガに絆変化した。

ラン「まずは私とピカチュウで怪獣の動きを止める！そのあとみんなお願い！」

メガジユカ・サトゲコ・リザードン『『おう！』』

まずランはリザードンに乗って怪獣の真上に飛んだ。

怪獣『なんのつもりか知らないがこのブラックキング様をなめんなよ！』

ラン「今よ！ピカチュウ、エレキネット！」

ピカチュウ『了解！くらえエレキネット！』

ブラックキング『なんだこれは動けない』

リザードンはランを降ろすと再び飛んだ。

リザードン『待たせたなここからは俺達のステージだ！』

リザードンはゲッコウガ達の隣にたち反撃宣言をする。

リザードン『いくぞお前ら』

メガジユ『ああ、我らの力』

サトゲコ『エースの力を見てやるでござる』

リザードン『くらえ！ビッグバン・・・』

メガジユ『リーフブレード・・・』

サトゲコ『超巨大水・・・』

リザードン・メガジユ・サトゲコ『『フレアストーム手裏剣！』』

スガーーーーー

プリキュア達「Σ（。ロ。）」

タケシ・シトロン「Σ（。ロ。）」

ユリーカ・マサト「Σ（。ロ。）」

リザードン達の合体技を食らったブラックキングは遥か上空までぶっ飛んで大爆発する。

リザードン『ふん！汚い花火だ！』

メガジユ『またつまらないものを斬ってしまった！』

サトゲコ『拙者達の勝ちでござる！』

ブラック「いくら何でもあそこまで殺らなくても（汗）」

ホワイト「あの子達全員相手だと怪獣に同情しちゃう（汗）」

タケシ・シトロンのマサト・ユリーカ「「うん（汗）」」

ラン「おつかれさまみんな」

ポケモン達『おう！』

こうしてランはガメラのショックから立ち直りピカチュウ達とみにごと怪獣を倒した。だが余りにも一方的なためプリキュアとシトロンの達は少し怪獣に同情してしまうのだった。

シーン6 昭和ライダーVSシヨツカー怪人軍団

ピリリ

ありす「もしもし、セバツチャンどうしたのですか？」

セバツチャン 『大変ですありすお嬢様この島の南側から1000体のシヨツカー怪人がこちらに向かって折ります』

光太郎「1000体のシヨツカー怪人！」

なぎさ「何その数ありえない」

つぼみ「宇宙海賊だけじゃなくシヨツカー怪人まで」

光太郎「とにかく現場に行つて見よう」

セバツチャン 『それともうひとつガメラが見つかりました』

ラン「え！本当ねえガメラは何処にいるの？」

セバツチャン 『この島の北側です』

ラン「わかった！光太郎お兄ちゃん私」

光太郎「行つておいでランちゃん。めぐみちゃん、のぞみちゃん、みゆきちゃん悪いけどランちゃんと一緒にガメラのところへ行つてくれるかな？」

みゆき「まかせて」

のぞみ「うん」

めぐみ「ランちゃん、ガメラの所へ行きましょう」

ラン「うんありがとう」

光太郎「それじゃ現場に向かおう」

ーーーー孤島南側ーーーー

なぎさ「本当に1000体いる」

光太郎「とにかくやるしかない。みんないくぞ」

プリキュア達「はい！」

なぎさ達はそれぞれ変身アイテムでプリキュアに変身した。

光太郎は太陽を背に片手を上げ変身ポーズを取った。

光太郎「変身」

光太郎の瞳の中に光の火花が現れさらに緑のボディが光輝きさらにライダーベルトが風車して仮面ライダーBLACK RXに変身をとげた。

RX「俺は太陽の子 仮面ライダーBLACK RX」

RX「いくぞ！」

プリキュア達「はい」

ホワイト「待ってあれ何？」

ブラック「え？まさか！ザノンの怪獣？」

ホワイト「どうするの、怪獣はほつとけないけどこっちはほつとけないよ」

RX「あの方角はたしかガメラのいる場所」

ブロサツム「大変ですランちゃん危ない」

???「ならばここは我々が引き受けよ」

RX「あなたは本郷先輩」

本郷「久しいぶりだな光太郎」

RX「どうしてここに？」

???「俺達もいるぞ」

RX「一文字先輩、風見先輩」

ルミナス「あのあなた方は？」

本郷「我々は」

本郷「一文字・風見はそれぞれは変身ポーズを取った。

本郷「ライダー・・・変身！」

一文字「変・・・身！」

風見「変・・・身 V3！」

本郷「一文字・風見「二とお！」」

3人のベルトは風車が回り仮面ライダー1号、2号、V3に変身した。

ブロサツム「うそ、この人達も仮面ライダー」

1号「光太郎ここは我々が引き受けた」

2号「早くランちゃんとガメラもとへ」

V3「女神ピンクから事情は聞いている」

ブラック「でもいくらなんでもあの数は」

1号「心配することはない」

2号「それに駆け付けたのは我々だけじゃない」

RX「え？」

???「俺達もいるぞ」

RX「！」

RXが振り替えるとそこにはライダーマン・X・アマゾン・ストロ
ンガー・スカイライダー・スーパー1・ZXがいた。

ピース「すごいこんなにかくさん仮面ライダーが!! (☆O☆)」

1号「さあここは任せて早くランちゃんという子とガメラを」

RX「解りました。先輩のみなさんお願いします。」

そう言うのとRXとプリキュアは怪獣の方角へ向かった。

怪人1「待て何処へ行く逃がさないぞ」

1号「ショットカーお前達の相手は我々だ! いくぞ」

昭和ライダー「おう！」

こうして昭和ライダーとショットカー怪人軍団の戦いが始まった。

1号「いくぞ! 一文字！」

2号「おう! 本郷！」

蜘蛛男「おのれ仮面ライダーめ！」

1号「とう！」

2号「たあ！」

1号と2号は2人で蜘蛛男にパンチのラッシュ攻撃をする。

蜘蛛男「おのれ」

1号「いくぞ！」

2号「おう！」

1号・2号「とう！」

1号・2号「ライダーダブルキック！」

1号と2号のライダーダブルキックは蜘蛛男に命中する。

蜘蛛男「キーキー」

1号と2号は蜘蛛男に背を向けキメポーズを取ると蜘蛛男は倒れ

大爆発する。

ライダーマン「やるぞ！風見！」

V3「おう！」

カメレオン男「このやろう」

ライダーマン「いくぞ！パワーアーム！」

カメレオン男「ぎゃあ」

ライダーマン「ロープアーム」

カメレオン男「ぐおお」

ライダーマン「今だ！風見！」

V3「いくぞ！V3反転キック」

カメレオン男「キーキー」

V3の反転キックはカメレオン男にみごと命中する。V3とライダーマンが背を向けキメポーズを決めるとカメレオン男は倒れ大爆発した。

X「いくぞ！ライドルステイック」

ザンジオー「ギヤア、おのれ仮面ライダー」

X「俺達がいるかぎりお前達の野望は何一つ叶わない！いくぞ」

Xライダーはライドルステイックを空高く投げ大車輪をした。

X「Xキック！」

ザンジオーにめがけてXキックを放った。

ザンジオー「ギヤアアおのれ仮面ライダー」

ザンジオーにXキックが命中する。Xライダーは背を向けキメポーズを取るとザンジオーは大爆発した。

アマゾン「キーキー！アマゾン友達守る！お前達のすきにさせない！」

イモリゲス「このやろう！」

アマゾン「キーキー」

イモリゲス「ギヤアア」

アマゾンはイモリゲスの腕に噛みつきさらに爪で切り裂いた。

アマゾン「いくぞ！キーキー」

アマゾンは大きくジャンプした。

アマゾン「大・切・斬！」

大切斬を受けたイモリゲスは真つ二つに切れアマゾンは背を向けキメポーズを取ると大爆発した。

ストロンガー「お前達の野望もここまでだ！」

サボテグロン「おのれ！これでもくらえ！」

ストロンガー「！」

サボテグロンはサボテン爆弾をストロンガーに投げ爆発する。

サボテグロン「ガハハハ！やったぞ！仮面ライダーを倒し『ドカ！』

イデッ！ストロンガー！貴様なぜ生きている！俺のサボテン爆弾が直撃したはず？」

ストロンガー「そんなこと俺が知るか！ここで止めだ！エレトリックファイアー！」

ストロンガーは地面に右手を突き刺しエレトリックファイアーを放った。

サボテグロン「ぎやあああ」

ストロンガー「いくぜ！ストロンガー電キック！」

サボテグロン「ぎやあああ」

ストロンガー電キックはサボテグロンに命中する。ストロンガーはサボテグロンに背を向けキメポーズを取るとサボテグロンは大爆発する。

スカイライダー「とう」

ドクガンダー「ぎやあ！おのれ仮面ライダー」

スカイライダー「貴様のような外道絶対にゆるさん！いくぞ！セイリングジャンプ！」

スカイライダーは大きくジャンプした。

スカイライダー「スカイキック！」

ドクガンダー「ぎやあああ」

スカイライダーはセイリングジャンプで空中にいるドクガンダーにスカイキックを命中させる。地上に着地するとキメポーズを取るとドクガンダーは大爆発する。

スーパー「せや！シヨッカー！覚悟しろ！」

アルマジロング「おのれ仮面ライダー」

スーパー1「一気ににきめる！ハンドチョンジ！冷凍ガス発射！」

アルマジロング「ぎゃあああ」

スーパー1はハンドチョンジで冷凍ガスでアルマジロングを凍らせた。

スーパー1「いくぞ！スーパーライダー月面キック！」

アルマジロング「ぐあああ！」

アルマジロングにスーパーライダー月面キックがみごと命中。

スーパー1は背を向けるとアルマジロングは大爆発する。

ZX「いくぞ！」

ガニコウモリ「おのれ！これでもくらえ」

ガニコウモリは腕の爪でZXを攻撃するが素早くかわされる。

ZX「今だ！ZXキック！」

ガニコウモリにZXキックが命中する。

ガニコウモリ「ぎゃあああ」

ZXは背を向けキメポーズを取るガニコウモリは大爆発する。

怪人1「バカなこれだけの数を相手にたった10人で」

怪人2「ありえない」

怪人達は自分達が負けたことを信じられずその場に倒れ大爆発する。

1号「お前達が何度蘇えようと俺達がいるかぎり何度でも倒す。よし！みんな光太郎の援護に向かうぞ！」

昭和ライダー「おう！」

こうして1000体のショッカー怪人はたった10人の仮面ライダーに倒された。

シーン7 宇宙刑事と謎の新ライダー

「……孤島北側……」

ラン「ガメラ……」

ユリーカ「お兄ちゃん、タケシガメラ大丈夫？」

タケシ「応急処置はすんだあとはガメラ次第だ」

シトロロン「大丈夫です。すぐ元気になります」

ラン「うん……」

北側に到着したラン達はガメラを発見したが意識不明になっていた。

ズシーン

ラン「え？」

マサト「嘘！怪獣がこっちに向かってる」

のぞみ「みゆきちゃん、めぐみちゃん」

みゆき・めぐみ「うん！」

3人はプリキュアに変身して怪獣のいるほうへ向かった。

ドリーム「ランちゃんはここにいて」

ラン「うん！」

怪獣『なんだ小娘どもこのギロン様とやろうと言うのか？』

ラブリー「いくよ！ラブリーライジングソード」

ドリーム「プリキュアシュテイングスター！」

ハッピー「プリキュアハッピーシャワー」

ドリームとハッピーの技が命中したあとラブリーは追い討ちにライジングソードで攻撃したただか・

ギロン「無駄だ！」

ギロンは頭を振り回しプリキュア達を吹き飛ばした。

ハッピー・ドリーム・ラブリー「「きゃあああ！」」

ラン「お姉ちゃん達！」

ギロン「ふん！さてとザノン様の命令だ死に損ないを始末するか」

ギロンは意識不明のガメラに攻撃をしようとした。

ラン「ガメラ！」

ギロン「くたばれ！」

その時

ボンボン

ギロン「ぐあー！」

ラン「え？何」

マサト「ラン見てあれ青いドラゴンだよ」

ラン「あのドラゴンさんは？」

???「あれは電子星獣ドルだ」

ラン「え？」

シトロン「あなたは？」

???「俺は一条寺烈、宇宙海賊ザノンを追ってきた宇宙刑事だ」

シトロン「え？宇宙刑事さん」

ギロン『てめえは宇宙刑事！こんなところまで』

烈「ザノンの手先め、これ以上すきにさせん」

烈「蒸着！」

烈がそう言うのと銀色の光に包まれる。

ギヤバン「宇宙刑事ギヤバン！」

『宇宙刑事ギヤバンは僅か0.05秒で蒸着を完了する。ではその蒸着プロセスをもう一度見てみよ』

烈「蒸着！」

ドルギラン『了解コンバットスーツ転送します』

烈の声がドルギランのメインコンピュータに音声認識されコンバットスーツが転送されたのだった。

ギヤバン「いくぞ！」

ドル『ガアアア』

ギヤバンはジャンプしてドルの頭に乗った。

ギヤバン「いくぞ！ドルファイアー」

ギロン『ぐあ、あち、あち』

ギヤバン「よし！今だ！レーザーブレード！」

ギヤバンはドルの頭からジャンプした。

ギヤバン「ギヤバンダイナミック！」

ギロン『ぎやあああ!』

ギャバンは上からジャンプし必殺技のギャバンダイナミックでギロンを上から垂直切りをした。ギロンは大爆発をした。

ラン「やった!」

シトロン「おみごとです」

ギャバン「ありがとう仮面ライダーが合流するまで君達の護衛させてくれ」

ラン「ありがとう、烈お兄ちゃん」

ギロンに襲撃をギャバンのおかげでなんとが凌いだラン達だった。ラン「そう言えばめぐみお姉ちゃんは?」

のぞみ「さっきの攻撃であっちの林にぶっ飛ばされたよ」

シトロン「僕とタケシでみてきます。ギャバンさんはランとカメラを頼みます」

ギャバン「わかった気を付けていくんだぞ」

――北側林――

めぐみ「いたた、ん?あれは?」

めぐみが林の向こう側を見るとショツカー怪人がいた。

めぐみ「嘘!ショツカー怪人」

怪人「誰だ!お前はプリキュア丁度いいここで始末するか」

めぐみ「(まずい!足を痛めて動けない)」

怪人「キーキー」

めぐみ「(もうダメ!助けて誠司!)」

???「そうはいくか!」

怪人「ぎやあ、何者だ!」

怪人が声のするほうを見るとそこには2人の仮面ライダーがいた。

レオ「俺は仮面ライダーレオ!」

ゼロ「俺は仮面ライダーゼロ!」

怪人「なんだとこんな仮面ライダー見たことない」

ゼロ「いくぜ!ゼロスラッガー」

ゼロは頭の角をカッターブーメランのように飛ばして怪人を切り裂いた。

怪人「ぎゃあ」

レオ「おりよ！とう！たあ！」

レオは怪人にパンチのラッシュ攻撃をした。

怪人「ぐえええ」

ゼロ「一気にきめるぜ」

レオ「ああ！」

ゼロ・レオ「ライダーダブルキック」

怪人「ぎゃあああ」

怪人は大爆発した。

めぐみ「すごい・あれ？あの仮面ライダーがない」

シトロ「めぐみさん大丈夫ですか？」

めぐみ「うん平気(あの仮面ライダーの声、聞き覚えがある誰だろ)」

シトロ「ともにめぐみはその場を立ち去った。」

ゼロ「いいのか？めぐみお姉ちゃん行っちゃうぜ」

レオ「ああ、いいんだ。それに多分そろそろ時間切れだ」

レオがそう言うと2人のライダーベルトはショートーして地面に落ちた。

誠司「やっぱり壊れたか」

奏太「うんまだ調整が終わっていないらしいし」

謎のライダーの正体は奏太と誠司だった。それは数時間前のこと。

数時間前

ーペンションー

ピンク「誠司君、奏太君」

誠司「あなたは女神ピンク様」

奏太「女神様がなぜここに？」

ピンク「実は2人にこれを」

誠司「これは？」

ピンク「レオドライバーとゼロドライバーです。これを使えばあなた達も仮面ライダーに変身できます」

誠司「本当か？でもどうして俺達に？」

ピンク「あなた達は大切な人が戦っているのに自分は何も出来ない

ことに悩んでますね」

奏太・誠司「!!」

ピンク「これを使えばあなた達の大切な人ともに戦うことができませす。ただしまだ調整中なので一回の変身が限界です。どうしますか？調整が終わるまで待ちますか？」

奏太「俺はアコを守りたい！それにランちゃんも俺とアコの大切な友達を」

誠司「俺はエビラにめぐみが食べれそうになった時何もできなかつた。俺やめぐみを本当の兄や姉のように慕うランちゃんを守ってやりたい」

ピンク「わかりました。ショッカー怪人の増援が北側に向かってます。急いで下さい」

奏太「おう！いくぜ誠司兄ちゃん！」

誠司「ああ！」

現在

誠司「俺達の役目はここまでだな」

奏太「ああ、みんなあとはまかせたぜ！」

そう言うと2人はその場を立ち去った。

シーン8 最強の刺客と復活のガメラ

「……………北側……………」

ラン「ん？ねえあれ何？」

全員「え？」

ランが言ったほうを見ると巨大な赤い玉がこっちに向かっていった。ギャバン「あれは！まさかザノンはその怪獣まで手駒にしていたのか？気をつけろ！これからくる怪獣は今までと比べものにならない！赤い玉は近くに降りると怪獣に姿を変えた。

ラン「何！あの怪獣なんか物凄くやばい感じする」

ギャバン「あいつは宇宙恐竜ゼットンとてつもない戦闘力を持った怪獣だ」

RX「ランちゃん」

ラン「光太郎お兄ちゃん」

RX「あなたは宇宙刑事ギャバン！」

ギャバン「久しぶりと言いたいがまずはゼットンだ！力を貸してくれ仮面ライダーBLACK RX！」

RX「はい！」

RXとギャバンは再会を喜ぶよりまずはゼットンを倒すことに集中することにした。

RX「よし！ライダー」

ギャバン「電子星獣ドル」

RXとギャバンはライダーと電子星獣ドルを呼んだ。

1号「光太郎」

そこに昭和ライダーが到着した。

RX「先輩の皆さん、プリキュアのみんな、ランちゃんとガメラを頼みます」

1号「わかった」

ブラック「任せて」

RXはライドロンに乗り、ギャバンは電子星獣ドルの頭に乗りゼットンの所に向かった。

ピンク「みなさん」

ラン「ピンクお姉ちゃん」

ピンク「ガメラを復活させる方法があります」

ラン「本当？」

ピンク「はい！おそろくあの怪獣を倒すにはRXとギャバンだけでは勝てません。ガメラの力が必要です」

ブロサツム「でもどうやって？」

ピンク「ミラクルライトです」

ラン「ミラクルライト？」

ピンク「はい！ミラクルライトで世界中の子供達の力を借りそれをガメラに集め復活させます」

ブラック「確かにその方法ならガメラが復活するかもしれない」

RX「なら俺達は」

ギャバン「ガメラが復活するまで時間稼ぎだ」

ラン「ピンクお姉ちゃんお願いガメラを助けて」

ピンク「わかりました」

ピンクはそう言うのとミラクルライトを世界中の子供達の所々に飛ばした。

ピンク「聞いてください、世界中の子供達！今とてつもなく強い怪獣と仮面ライダーとプリキュアが戦っています。でも彼らだけじゃあ怪獣には勝てません。怪獣を倒すにはガメラの力が必要です。あなた達の願いでガメラを甦らせてください」

世界中の子供達の所に現在の戦闘の映像とガメラの様子とピンクの声とミラクルライトが届いた。

男の子「ガメラお願い仮面ライダーを助けて」

女の子「ガメラお願いプリキュアを助けて」

ここはある和菓子店

ももか「お姉ちゃん、私もプリキュアを助けたい」

はるか「うん、そうだね、お願いガメラ、プリキュアにはあなたの力が必要なの」

ももか「ガメラ、プリキュアを助けて」

和菓子店の姉妹もガメラが復活するようにミラクルライトをふる。ここはあるパン屋さんのある公園にクマのぬいぐるみを抱いた少女がいた。

未来「モフルン私達も祈りましょう。ガメラお願いプリキュアをみんなを助けて」

クマのぬいぐるみを抱いた少女もミラクルライトをふった。

ここはある街の商店街、ピンクの服を着た少女がいた。

いちか「お願いガメラみんなの大好きを守って！」

少女はミラクルライトをふり祈りを込めた。

ここはある住宅街。

ことり「お姉ちゃん私達もやろう」

はな「うん！お願いガメラみんなの輝く未来を守って」

住宅街の姉妹もミラクルライトに祈りを込めた。

子供達「ガメラ」

はるか・ももか「ガメラ」

未来「ガメラ」

いちか「ガメラ」

はな・ことり「ガメラ」

世界中の子供達、そして後にプリキュアになる少女達の祈りが虹色の光となりガメラのもとへ向かった。

ラン「あ！あれはもしかして」

ガメラに虹色の光が降り注ぎそして・・・ガメラの傷はみるみる回

復し静かに目を開けた。

ラン「ガメラ」

ガメラ『ラン・・・心配かけたなもう大丈夫だ』

ラン「うん！ガメラ、光太郎お兄ちゃん達を助けて」

ガメラ『ああ、任せておけ！』

ついに復活したガメラ今、宇宙海賊ザノンとの最後の決戦が始まる。

シーン9 誕生！女神のプリキュア

R X 「ぐあー！」

ギャバン 「R X大丈夫か？」

R X 「はい、なんとか」

R Xとギャバンはゼットンに戦いを挑むがゼットンの凄まじい戦闘力に次第に追い詰められ始める。

R X 「まずいこのままだと」

ガメラ 『だったら俺が力を貸すぜ』

R X・ギャバン 「ガメラ」

ガメラ 「待たせたなー！」

ギャバン 「気をつけろ！奴は光線技などを吸収して跳ね返すことができる」

R X 「それにとんでもなく強力なバリアがある」

ガメラ 『なるほど・・・ならプラズマ火球！』

ガメラはゼットンにプラズマ火球を放ったしかしバリアで防がれてしまう。

ガメラ 『今だ！プラズマ火球』

ゼットンはバリア張ろうとするがその前にプラズマ火球が命中する。

R X 「これは？どういうことだ？」

ガメラ 『あいつがバリアをはる僅かな隙について攻撃した』

ガメラはゼットンがバリアをはる僅か数秒の隙についてプラズマ火球を命中させた。

ザノン 「さすがだなガメラ」

ギャバン 「現れたな宇宙海賊ザノン！」

ザノン「ゼットンは私が送り出した最強の怪獣。それくらいで倒せると思ふなよ」

ザノンはゼットンに向け何かを撃ち込んだ。

ゼットン 『!!』

ガメラ 『お前何をした？』

ザノン『強化薬を撃ち込んだ。これでゼットンは更に強くなった』
ゼットン『!!』

ラン「あの怪獣さん苦しんでいる」
ガメラ『まさか!』

RX「撃ち込んだ薬が強すぎた」

ザノンに強化薬を撃ち込こまれたゼットンは暴走を始めてしまう。
ゼットン『ゼットン・・・』

ガメラ『ぐあ!速い動きが見えない』

ラン「ガメラ!」

ガメラはゼットンの攻撃に倒れこむ。

ラン「ガメラ、どうしたらいいの?」

『あきらめるなラン』

ラン「え?今の声」

『あなたの想いをガメラに伝えるのよ』

ラン「この声は!・・・わかったよサトシお兄ちゃん、セレナ」

ガメラが倒れたことに落ち込めランだがサトシとセレナの声が再び彼女を立ち上らせる。そしてランは静かに歌い始める。

ユリーカ「え?ラン」

マサト「ランが」

タケシ「歌っている」

シトロン「すごいです。とても心が癒されます」

ラン「私はいつも守られてばかりだっただから今度は私がみんなを守る」

マサト「ラン、僕も力をかすよ」

ラン「マサト!うんありがとう」

そしてランとマサトはお互い拳を合わせるとあたりが光に包まれる。気が付くと真つ白空間にいた。

ラン「あれ?ここは?」

ユリーカ「どこなの?」

マサト「何もないね」

???「ユリーカ」

??? 「マサト」

ユリーカ・マサト「!!」

マサト「お姉ちゃん!」

ユリーカ「セレナ!」

マサトとユリーカが声をするほうをむくとそこにはマサトの姉ハルカとカロスを共に旅したセレナがいた。

ラン「ハルカ、セレナ」

セレナ「久しぶりラン」

ハルカ「ラン久しぶりかも」

??? 「かもはらないでしょう」

??? 「まあ、まあ、あれはハルカの口癖だしね」

??? 「そうですね」

ラン「え?カスミ・ヒカリ・リーリエ」

カスミ「久しぶりねラン」

ヒカリ「久しぶりラン」

リーリエ「お元気でしたか?」

ラン「どうしてみんな?」

セレナ「アルセウスが私に少しだけ話す時間をくれたの」

ユリーカ「アルセウスが?」

カスミ「時間がないわ、ラン私達の想いをあなたに託す」

ラン「え?」

ハルカ「あなたは強いわ、私達が思ってるよりも」

ヒカリ「ランなら大丈夫!」

リーリエ「あなたならどんな困難でも乗り越えられます」

セレナ「あなたは私の最愛の人の妹。あなたならきっと大丈夫よ」

ラン「カスミ、ハルカ、ヒカリ、リーリエ、セレナ(涙)」

セレナ「ほら泣かないの」

ラン「うん!ありがとう」

カスミ「そろそろ時間みたい」

ハルカ「マサト、ランを頼んだわよ」

マサト「うんまかせて」

ハルカ「でも鼻血を出すのは程々かも」

マサト「お姉ちゃん！というか何で知っての？／＼／＼／＼／＼」

ヒカリ「ははは、マサト顔真つ赤だよ」

ラン「どうしたの？マサト」

マサト「なんでもない／＼／＼／＼」

ハルカ「（これだと両思いになるのは当分さきかも）」

セレナ「それじゃユリーカランをお願いね」

ユリーカ「うん」

ラン「セレナ・・・」

セレナ「そんな顔しないで私達はいつもあなたを見ているわ」

ラン「うん」

そしてセレナ達は少しずつ消え始める。

カスミ・ハルカ・ヒカリ・リーリエ・セレナ「「ラン！私達はいつもあなたを見守っているよ」」

そう言うとセレナ達は消え気が付くともとの場所において手にはピンク色でアルファベットPと書かれたZクリスタルが誕生していた。

ラン「え？このZクリスタルは？」

ピンク「それはプリキュアZクリスタルです。それをZリングにセットして『プリキュア・Zクリスタル・チャージ』と言ってください
い」

ラン「え？それってもしかして！わかった！（いくよ！カスミ！ハルカ！ヒカリ！リーリエ！セレナ！）」

ランはZリングにプリキュアZクリスタルをセットした。

ラン「プリキュア・Zクリスタル・チャージ！」

ランの体は光に包まれリーリエの服に似た白いコスチュームに代わり足にヒカリがはいてたブーツに似たピンク色ブーツに代わり手にはハルカがいつもつけてるグローブを付け胸元にはセレナがサトシからもらった青いリボンがつき髪はリーリエと同じ黄色のポニーテールになり髪止めにはカスミがいつも付けるものが付いた。

ミュウ「みんなを見守り 未来を導く 女神のプリキュア キュア ミュウ！」

ピカチュウ『ランが』

リザードン『プリキュアに』

ジュカイン『変身』

ゲッコウガ『したでござる』

シトロロン「これはとんでもない奇跡です」

タケシ「ああそうだな（サトシ見ているか？お前の妹はすごいプリキュアになってしまったよ）」

『ああ、ちゃんと見てるぜタケシ！』

タケシ「！」

タケシが声のするほうをむくとそこには半透明のサトシがこつちを見て笑っていた。

ミュウ「カスミ、ハルカ、ヒカリ、リーリエ、セレナありがとう」
キュアミュウの隣には半透明のセレナ達がニツコリと笑ってキュアミュウを見つめていた。

ミュウ「ガメラこれで元気になってプリキュア癒しの波動！」
倒れるガメラに癒し波動を送る。するとガメラの傷は回復した。

ミュウ「ガメラ、お願いゼットンさんを助けたいの。ここは私にまかせて」

ガメラ『え？お前もしかしてランなのか？・・わかったただか危険と判断したらすぐ助けに入る』

ガメラはそう言うときュアミュウはゼットンのほうに向かった。

ミュウ「いくよ！ゼットンさん待っててね、今その苦しむから助けてあげる」

ゼットン『ゼットン・・』

ミュウ『プリキュア光の壁』

キュアミュウはゼットンの撃ってきた火の玉を光の壁で防いだ。

ミュウ「この火の玉・・あの時ガメラを攻撃したのはゼットンさんだったの」

キュアミュウは火の玉を見てガメラを重傷を負わせたのがゼットンだとわかった。

ミュウ「でも今はあなたを助けたい。プリキュア・オリジンズスー

パーノヴァ！」

キュアミユウは必殺技をゼットンに向けて放ったするとゼットンは虹色の光に包まれゼットンの顔は安らぎの表情に変わり浄化された。

ザノン「バカなゼットンがプリキュアごときにやられただと」

RX「どうやらお前はプリキュアを甘く見てたみたいだな」

ザノン「なんだと」

ギャバン「お前は仮面ライダーや俺やガメラにこだわりすぎてプリキュアにかんしては全く警戒してなかった」

ガメラ『おそらくお前はプリキュア達を仮面ライダーのおまけ扱いしていたのだろう』

RX「だからプリキュアになったばかりのランちゃんにも勝てなかった。それにこの世界はもともと仮面ライダーは存在しない。これがこの世界を本来守っているプリキュアのカだ」

ギャバン「プリキュアを甘く見て浄化技対策しなかったお前のミスだ」

プリキュアに覚醒したランによって最強の刺客ゼットンは浄化された。いよいよザノンと直接対決となる。

シーン10 最後の決戦 放て！ランとガメラのZ 技

ザノン『ふははは、成る程確かに私はプリキュアを甘く見てたみたいだ・・だが』

ゴゴゴゴ

ミュウ「きやあ何？この揺れ」

ユリーカ「あ！あれ見て」

空から巨大な宇宙海賊ザノンが現れた。

ミュウ「あれが宇宙海賊ザノン」

シトロン「なんと言う大きさ」

そしてザノンから青い光が降りてきた。

ザノン「仮面ライダー、宇宙刑事、そしてプリキュアの諸君私が宇宙海賊ザノンの船長ザノンだ」

RX「お前がザノンか」

ブラック「あなたのはすきにはさせない」

ザノン「ふん！それはどうかなそしてあれがわが海賊船にして最後の切り札アーマーザノンだ」

ミュウ「海賊船がロボットになった」

ザノン「ガメラ、お前の相手はそいつだ」

ガメラ『ふん、機械人形なんかに負けるか！』

アーマーザノン『ピピピ』

アーマーザノンはキュアミュウに向かってレーザーを射った。

ガメラ『危ない』

ガメラはとっさに甲羅でキュアミュウを守った。

ザノン「ガメラそれがお前の弱点だ！お前は人間の子供を攻撃すると必ずそうやって守る」

ブラック「まさかわざとランちゃんをミュウを狙ったの？」

ザノン「そうだそいつなら必ずそうすると思った！アーマーザノン

そのまま飛んでガメラと空中戦だ！さてまずはお前達をかたずける

そのまま飛んでガメラと空中戦だ！さてまずはお前達をかたずける

そのまま飛んでガメラと空中戦だ！さてまずはお前達をかたずける

そのまま飛んでガメラと空中戦だ！さてまずはお前達をかたずける

か」

シユン

RX「何!」

1号「速い!」

プリキュア達「キヤアアア」

ミュウ「プリキュアのお姉ちゃん」

プリキュア達はダメージを受けキュアブラックとキュアホワイト以外変身が解けて気絶した。

ザノン「次はお前達だ仮面ライダー!」

1号「何!」

昭和ライダー「ぐああああ」

昭和ライダーはダメージを受け変身が解けてしまった。

本郷「なんて速さとパワーだ」

RX「こうなったら俺達だけでいくぞ!」

ギャバン「ああ!」

ブラック・ホワイト「はい!」

RX「ミュウ!君はガメラの援護だ」

ミュウ「わかった光太郎お兄ちゃん頑張つて」

空中ではガメラとアーマーザノンが激しい戦いを繰り広げていた。

ガメラ『プラズマ火球』

アーマーザノン『!!』

アーマーザノンにプラズマ火球が命中。

ガメラ『よし行けるぞ』

ザノン「アーマーザノンめ何を手こずつてだ」

ブラック「たあ!」

ホワイト「はあ!」

ザノン「くつ!この俺がこんなバカなことがあるのか」

RX「俺達はお前なんかには負けない!」

ブラック「そうよあんたなんかには負けない!」

RX「人間の自由と平和の為」

ブラック「みんなの笑顔と夢を守る為」

ガメラ『子供達の未来を守る為』

RX・ブラック・ガメラ「『この星を守る為に戦うそれが』」

RX「仮面ライダーだ！」

ブラック「プリキュアよ！」

ガメラ『ガメラだ！』

ギャバン「RX！一気に決めるぞ！レーザーブレード！」

ホワイト「ブラックいくよ」

RX・ブラック「ああ（ええ）」

RX「リボルケイン」

ブラック「ブラックサンダー」

ホワイト「ホワイトサンダー」

ブラック「プリキュアの美しき魂が」

ホワイト「邪悪な心を打ち砕く」

ブラック・ホワイト「プリキュアマーブルスクリュー！」

ザノン「ぐおおお」

ブラック「今よ！光太郎さん」

ギャバン「いくぞ！ギャバン！」

RX「RX！」

ギャバン・RX「ツインダイナミック！」

ザノン「バカなこの私がああああ」

ドカーーーーン

ブラック「終わったそうだがメラは？」

RX「あれは？ガメラとアーマーザノンだ」

ガメラ『くそ』

アーマーザノン『ピピピピ』

ミュウ「ガメラ何かないの？逆転できる方法・ん？あれこんなZ
クリスタルもっていたけ？あれ？光始めたもしかして使えてことか
な？よしガメラいくよ」

ガメラ『それはいいぜ！ただしチャンスは一回だ！』

ミュウ「うん」

キュアミュウはZリングにアルファベットのGと書かれたZクリスタルをセットした。

ミュウ「いくよ！ 火炎噴射よりも強いプラズマ火球」

ガメラ『プラズマ火球よりさらに強い』

ミュウ「私達の超全力のZ技」

アーマーザノンは口からレーザーを射った同時に

ミュウ・ガメラ『アルティメットプラズマ』

アルティメットプラズマが発射されそしてレーザーはガメラの頬をかすれアルティメットプラズマはアーマーザノンに直撃した。

ドカーーーーン

アーマーザノンは大爆発した。

RX「どうやら終わったみたいだな」

ミュウ「ふうガメラありがとう」

ガメラ『お礼を言うのは俺のほうだ！ 君に会わなければ俺はあのまま浜辺で死んでいたかもしれないありがとう』

ミュウ「そんな、なんか嬉しい（照）」

ガメラ『ふふふ（笑）』

こうして宇宙海賊ザノンは倒された。そしてガメラとランの間には強い絆が生まれていた。

シーシー また会う日まで・・・

ユリーカ「おーい」

ミュウ「ユリーカ、マサト」

マサト・ユリーカ「ラン」

キュアミュウが2人に近づこうとしたその時

ミュウ「あ！」

キュアミュウの体は突然、光始めランに戻った。

ユリーカ「あ！」

マサト「／／／／／」

ラン「あれ？もとに戻ったあれ？マサトどうしたの？」

ボン

マサト（妖精）「(??O??)」 「ブシュー 《鼻血》」

ラン「ええええ！何で鼻血出して倒れるの？Σ(。O。」

なぎさ「あのランちゃん（汗）」

ラン「どうしたのなぎさお姉ちゃん？」

ほのか「とりあえず服来て（汗）」

ラン「え？何で裸なのプリキュアて変身解いたら裸なの？Σ(。O

。（あれ？なんでかな？マサトに裸を見られたことがすごく恥ずかし

いバカンス時やこの間（本編9話参照）は見られても恥ずかしくな

かったのに今はすごく恥ずかしい）／／／／／」

なぎさ「ねえほのか、ランちゃん様子が変だよ？」

ほのか「もしかしてランちゃん、マサト君に裸を見られて恥ずかし

いと思っただんじゃないかな？」

プリキュア達「えええええΣ(。O。」

ピカチュウ『ランが』

リザードン『マサトに』

ジュカイン『裸を見られて』

ゲッコウガ『恥ずかしいと思っただけでござると』

ユリーカ「何かこれ信じられない」

タケシ「あのランが異性を意識しただと」

ラン「え？何？何で皆驚いての？どうでもいいから誰か服頂戴恥ずかしいよう／＼／＼／＼」

ピンク「もしかしたらプリキュアに変身した影響かも知れません」
つぼみ「どう言うことですか？」

ピンク「実は女神がプリキュアに変身するにはある条件があるです」

めぐみ「その条件てなんですか？」

ピンク「はい♪それは恋をすることです。おそらくランちゃんはまだ自覚がないみたいですけど、マサト君に恋をしたんだと思います

(〇〇)」

ポケモン・プリキュア・シトロン・タケシ・ユリーカ『「「ええええええええええΣ(。O。)」』』

ピカチュウ『ランが』

リザードン『マサトに』

ジュカイン『恋を』

ゲッコウガ『したでござるか？』

タケシ「なんかとんでもないことになったな(汗)」

シトロン「ええ(もしサトシが知ったらどうするでしょうか?)」

『大丈夫だ！シトロン、マサトにならランを任せてもいいぜ！』

シトロン「え？」

シトロンが声のするほうを向くと半透明のサトシがいた。そしてこちらを見て笑うと消えた。

シトロン「・・・」

タケシ「どうしたシトロン？」

シトロン「タケシ・・・僕は疲れてるでしょうか？さつきサトシの幻覚が見えて『マサトにならランを任せられる』と笑顔で言ったあと消えたのです」

タケシ「そうか・・・(サトシの奴ちゃんと見てたんだな)」

その後女神ピンクの魔法で服をようやくやくきたランだった。

ラン「ふうく、やっと服を着れたまさか変身が解けたら裸なんて
びつくりしたし恥ずかしいかったよ」

めぐみ「でも何で変身が解けたら裸だったの?」

ピンク「おそらく彼女が恋を自覚していないのと彼女の中に眠る女神の力が覚醒してないからだと思います。その為にプリキュアの力がコントロール出来ず変身が解けたら裸だったのでしよう(それにしてもまだ女神の力が覚醒していないのにプリキュアに変身できるなんてさすがあなたの娘ねプラチナ!)」

ピンクはランがプリキュアに変身したことで彼女の母で自分の親友のことを思い出した。

ガメラ『ラン!』

ラン「ガメラ行っちゃうの?」

ガメラ『ああ』

ラン「また会える?」

ガメラ『わからない。長い旅になると思うからな。この宇宙にはザノンのような奴がいるかもしれない。だから俺は行く子供達の未来を守る為に』

ラン「ガメラ・うんわかった!でも必ず地球に帰って来てね。約束だよ!」

ガメラ『ああ、約束する必ず俺は地球に帰って来る』

ラン「またねガメラ!」

ガメラ『またなラン!』

ガメラは手足と頭を引っ込めると回転ジェットで飛び始めた。

ラン「ガメラくまたね」

シトロロン「それにしても宇宙海賊ザノン。彼はなんだたっんでしよう」

烈「ザノンのことを少し調べたがあいつは宇宙が汚されたことで生まれたいだ」

光太郎「となると宇宙が汚され続けければ」

タケシ「宇宙海賊ザノンは何度でも甦る」

なぎさ「えええ!」

光太郎「可能性がないわけじゃないかな？備える必要がある」

シトロン「次にガメラが来てくれるとは限りませんからね」

ラン「来るよ！ガメラはきつと来るよ！」

こうして宇宙海賊ザノンの戦いは幕を閉じた。ガメラは宇宙にはザノンのような奴がいるかもしれないと宇宙を旅することになった。そして宇宙が汚され続ければまたザノンが生まれるかもしれない。でもランは信じた。またその時はガメラがきつと来てくれると。約束を守る為に。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

EDテーマ【ガメラマーチ】

街を飛ぶガメラそんなガメラに和菓子店の姉妹の2人が笑顔で手を振る

公園でクマのぬいぐるみを抱いた少女も手を振る。

商店街にいるケーキを買って帰る少女も手を振る。

住宅街にいる姉妹も元氣よく手を振る。

孤島のペンションから奏太と誠司も手を振る。

浜辺でランが空を眺める。そんなランにピカチュウが肩に乗って笑い合う。その様子を光太郎とプリキュア達が静かに見つめる。その様子を半透明のカスミ・ハルカ・ヒカリ・リーリエ・セレナが見守る。ランと目が合うとニコツと笑い消える。ランはセレナにありがとうと伝える。

ガメラは宇宙に出ると地球を見つめ銀河の彼方へ飛んでいった。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

ーシヨツカーアジトー

首領「まさかザノンがやられるとは」

???「そろそろ僕達がやるしかないみたいだね。必ず仮面ライダーと

プリキュアを倒してランを僕のものにしてやる」

???「随分な自信ね」

??? 「彼女は強い僕の花嫁になるべきだ！強い奴の花嫁になる。基本だろ？」

??? 「待てよ！ランを花嫁にするのは俺だ！なんたって俺はイツシユリーグであいつの兄貴に勝ったんだからな。つまり俺はあいつの兄貴より強い。だからランは俺の花嫁になるべきだ」

??? 「ふん！あんな弱いポカブを育てた奴に勝って自慢するな。あのランとか言う小娘を俺のものにしてあの野郎が絶望する顔が見たかったけどな」

??? 「全くこいつらは欲望もろだしね」

??? 「こいつら全員揃って子供ね」

首領「いいだろ…… お前達3人の中から仮面ライダーとプリキュアを倒してたものに次期首領とそしてランという娘を花嫁すること認めよう。いまからランという娘は次期首領の花嫁だ！そしてシューティー、コテツ、スワマ。お前達は今からショツカー次期首領候補だ」

シューティー「ありがとうございます首領」

コテツ「必ず期待に答えます」

スワマ「必ず仮面ライダーとプリキュアを倒してランを手に入れて見せます」

ザノンの戦いが終わったのも束の間ショツカーが新たな動きを見せようとしていた。そしてショツカー首領はシューティー達3人に次期首領の座を約束した。王座にはショツカーマークのZクリスタルとライダーベルトが置かれていた。

END

前日談・後日談・デイレクターカットシーン 前日談

女神神殿から戻ってきたランとユリーカとプリキュアは海水浴に着る水着を買いにデパートに来ていた。

ユリーカ「わあすごい可愛い水着がいっぱいある」

つぼみ「ユリーカちゃん好きな水着を選んでくださいね」

ユリーカ「うん！あれ？あっちの水着・・・そうだ！ニシシシ（〇〇）」

ユリーカ「ねえめぐみ、あっちの水着なんかいいんじゃないきつと誠司も喜ぶよ」

めぐみ「あっちの水着で・・・なあ！／／／／／／／／／／」

ひめ「あれ水着なの？／／／／／／／／／／」

つぼみ「胸元が丸見えです／／／／／／／／／／」

ユリーカ「良いでしょ、あれならきつと誠司も喜ぶよ（〇〇）」

ユリーカが言った水着は胸元が大きく空いたハイレグで一言で言うどキュティハニーの衣装がそのまま水着なった感じだった。

なぎさ「ユリーカちゃんさすがにあの水着は／／／／／／／／／／（汗）」

ユリーカ「え〜でもプリキュアの衣装とあまり変わらないと思うけど？」

咲「いや、プリキュアの衣装はあそこまで丸見えじゃないよ／／／／／／／／／／」

ラン「あ！じゃあ、めぐみお姉ちゃんあっちの水着はあの水着は私達の世界にもあったよ」

めぐみ「へ〜どんな水着・・・なあ！／／／／／／／／／／」

響「これはまたすごい水着だね／／／／／／／／／／」

なぎさ「ねえランあなた達の世界にあったというけど一体誰が着たの？／／／／／／／／／／」

ラン「私とユリーカが一緒に旅したセレナにユリーカと2人でサブライズで買ってプレゼントしたんだ」

なぎさ「(そのセレナで子こんな水着を着せられたの?)」

ユリーカ「あの時、セレナ顔真っ赤だったね」

ラン「うん、お兄ちゃんとシトロンも真っ赤だったよ」

亜久里「(こんな水着させられたらそんな反応になります)」

ランの言った水着は胸元が半分見えおへそがまる出しの水着だった。一言で言うとヤッターマンのドロンジョーの衣装が水着になった感じだった。

ラン「これならきつとプリキュアのお姉ちゃん達に似合うと思うよ？」

プリキュア達「え?／／／／／／／／」

なぎさ「あのくランちゃん?まさかこの水着を私達全員に着てほし
いてこと?／／／／／／／／」

ラン「うん!そうだよ、だつてみんなお揃いになるしね」

プリキュア達「えええええ／／／／／／／／」

ランの爆弾発言にプリキュア達全員は驚きの声をあげた。その後プリキュア達なんとかランを説得して自分達の水着を買ったのだ
た。

マナ「まさかランちゃんにあんな水着を着てほしって言われるなん
て／／／／／／／／」

なぎさ「子供で純粹だと言うけどランちゃんとユリーカちゃんは純
粋過ぎるよ／／／／／／／／」

つぼみ「そう言えば結局ランちゃんは水着買いませんでしたね」

のぞみ「なんかサイズが合う水着がなかったて言っていたよ」

ほのか「でもランちゃんぐらいの年齢の水着なら合う水着はあると
思うけど」

スマイル・フレッシュ・めぐみ・アコ「**」**(多分あのスタイルせい
だ**」**)

ランのサイズに合う水着がなかったことを疑問に思うプリキュア
達だが女神神殿と一緒に温泉に入った、めぐみ・アコ・フレッシュ組・
スマイル組は原因が何かすぐにわかった。

ラン「すごく可愛い本当にいいの?ピンクのお姉ちゃん?」

ピンク「はい、この水着はあなたのママが子供の時に着ていた水着です」

ラン「私のママてハナコママじゃなくて本当のママのほう？」

ピンク「はい、女神の水着は特別で水着を着るとその人物のサイズにピッタリなるように造られますのであなたがこの先大きくなっても使えますよ」

ラン「ありがとう！ピンクのお姉ちゃん」

こうして水着を手に入れたランは大喜びするのだった。

後日談

宇宙海賊ザノンとの戦いを終えた光太郎達は昭和ライダーと宇宙刑事ギャバンを加え再びバカンスを楽しんでいた。

本郷「しかし宇宙海賊ザノン恐ろしい相手だったな」

一文字「ああ、女神ピンクの話だとシヨツカーと同盟を組んでいたらしいぜ」

風見「それにしてもシヨツカーは残酷な奴だ。あんな少女から家族を奪うなんて俺もデストロンに家族を殺されたからそれがどれだけ辛いかあの子の気持ちがわかる」

神「俺達仮面ライダーは大切な人を過去に失っているシヨツカーのことに俺達ももっと早く気づいてあの子のいた世界に行っていればあの子にこんな辛い思いさせることはなかったのに」

村雨「俺達のできることは早くシヨツカーを倒してあの子が安心して暮らせるようにすることですね」

沖「ああ、それがあの子の家族を救えなかった俺達のできることだ」

ラン「仮面ライダーのお兄ちゃん達どうしたの?」

本郷「ランちゃん、それとシトロン君、タケシ君、ユリーカちゃん、マサト君、すまなかった」

ラン「え?」

シトロン「どうして僕達に謝るのですか?」

一文字「俺達ももっと早くシヨツカーのことに気づいてればランちゃんの家族や親友がシヨツカーに殺されることはなかったかもしれない」

風見「シヨツカーのことに気づいて君達の世界に行ってればこんなことにはならなかったかもしれない」

マサト「そんな仮面ライダーのせいじゃないよ」

ユリーカ「そうだよ」

ラン「仮面ライダーのお兄ちゃん。私全然気にしてないよ。今は光太郎お兄ちゃんやプリキュアのお姉ちゃんがいるから全然平気だよ。」

光太郎「本郷さん、ランちゃんもこう言ってます。前にシヨツカーにやられた時にリザードンに怒鳴られたのです。いつまでも過ぎたことに拘るなと言われました」

本郷「そんなことがあったのか？」

なぎさ「はい！私達プリキュアは全員シヨツカーに捕まってそれで光太郎さんは反撃できずにシヨツカー怪人にやられてしまったのです。でもそのせいでランちゃんとピカチュウがシヨツカー怪人と戦うことになって限界まで力を出したランちゃんは倒れてしまったんです」

シトロロン「そのあと女神神殿に連れて来てランはすぐに元気になりました」

タケシ「だからいつまでも気にしないでいいです。俺達は大丈夫ですから」

ラン「それにね、サトシお兄ちゃんはいつも私を見守ってくれてると思うの」

本郷「ありがとう！ランちゃん。俺達仮面ライダーは必ずシヨツカーからキミを守ると亡くなったキミのお兄さんに約束する。」

なぎさ「私達、プリキュアも約束するよ！絶対ランちゃんをシヨツカーから守るよ」

ラン「うん！約束だよ！」

仮面ライダーとプリキュアはあらためてシヨツカーからランを守ると誓うのだった。

『ランを妹を頼んだぜ仮面ライダー！プリキュア！』

全員「え？」

声のほうを見ると半透明のサトシがいた。そして笑うと消えた。

プリキュア達「・・・」

シトロロン「タケシ今のは？」

タケシ「俺達は幻覚を見たのか？」

ラン「(お兄ちゃんありがとう) あーそうだ！」

ランはプリキュアZクリスタルを取り出した。

ユリーカ「ラン、それってもしかして」

ラン「えへへ見ててね。いくよ！」

ピンク「え？待っててくださいランちゃんあなたはまだプリキュアには……」

ラン「プリキュア・Zクリスタル・チャージ」

ランの体は光に包まれた。そして……

ラン（全裸）「みんなを見守り 未来を導く 女神のプリキュア キュアマミウ！」

ユリーカ「あら〜（汗）」

マサト「＼／／／／／／／／／」

ボン

マサト（妖精）「（??O??） ブシユユユユユ」

ラン（全裸）「ええええええ！マサト何で鼻血だすの？あれ？プリキュアになってないまた裸になっているよΣ（。ロ。）いややや恥ずかしいなんでマサトに裸を見られたら恥ずかしいの？この気持ちなんなの？／／／／／／／／／」

ピンク「はあく遅かったですね。あの子がプリキュアに覚醒するに は女神の力を目覚めさして恋を自覚しなければ無理です。今のまま 変身するば全裸なつてしまいます（汗）」

なぎさ「私達の変身条件ランちゃんと同じじゃなくてよかったね（汗）」

プリキュア達「うん（汗）」

ラン「はあくショックプリキュアに変身出来ないなんて?？」

ユリーカ「大丈夫だよ！ランならきつとまた変身出来るよ」

ラン「うん！ありがとうユリーカ！」

こうしてバカンスを楽しむラン達だった。

本郷「光太郎、俺達はこの世界に残って海外のショッカー部隊と戦う。日本とランちゃんを任せたぞ！仮面ライダーBLACK RX！」

光太郎「はい！本郷さん達もお元気で」

烈「俺は一度銀河連邦警察に今回のことを報告する。また会おう仮面ライダーBLACK RX、プリキュア」

光太郎「はい！」

プリキュア達「お元気で」

ラン「烈お兄ちゃん元気でね」

烈「ランちゃん辛い時には勇気を持って立ち向かうだ！そうすれば道は開く。あばよ涙！よろしく勇気だ！」

ラン「うん！わかった」

そして本郷達10人の仮面ライダーはプリキュアの世界に残り海外のショッカーと戦うことにした。宇宙刑事ギャバンは今回の事件の報告のため銀河連邦警察に帰還するのだった。

ディレクターカットシーン

①【バカンスその2】

ランは西側に声が聞こえると言って西側に行ってしまった。
なぎさ「行っちゃたね、ランちゃん1人で大丈夫かな？」

ほのか「大丈夫よ！マナちゃん達があとを追いかけたからそれにピカチュウも一緒だしね」

ひめ「そうだ！ねえユリーカ一つ聞いていい？」

ユリーカ「何？」

ひめ「何でマサトは鼻血を出す時に妖精になるの？」

ユリーカ「ああ、それは多分この間（本編9話参照）の出来事の時
に妖精の姿で鼻血を出しちゃったからあれ以来女の子の裸を見て興奮すると妖精になっちゃう体質なっちゃったみたいなの。まあ今の所はランの裸しかみてないけどもしかしたらランの裸で鼻血が出る体になっちゃたのかも」

ひめ「そうなんだ（なんか色々気の毒だなマサト）」

マサト「うう、まだ目がクラクラする（x|x）」

タケシ「大丈夫かマサト全く羨まし・・・じゃなくて災難だったな？」

マサト「・・・タケシ今、羨ましいって言いかけたでしょ？」

タケシ「な、なにを言ってる俺はそんなやまし『グサ！』・・・誤・・・解だ・・・シビ・・・レビ・・・ビレΣ（?□———）」

グレッグル『ケツ・・・』

奏「タケシさんさすがに7歳相手にそれは・・・」

そんなことをしているとピカチュウが慌ててやってきた。

ピカチュウ『光太郎』

光太郎「どうした？ピカチュウ？」

ピカチュウ『あつちで巨大亀がケガしてるの。早く手当てを』

光太郎「わかった。すぐに向かう。」

ユリーカ「ねえマサト巨大亀てまさか」

マサト「ユリーカ！僕達も行こう」

タケシ「なら俺も行く」

咲「タケシさんΣ（。ロ。」

舞「いつの間にΣ（。ロ。」

エレン「復活はやっ!!Σ（。ロ。」

こうして光太郎達はピカチュウの案内で西側に向かった。

②【彼女はただの子供じゃない】

疲れたランをペンションへ運んだ光太郎とピカチュウはガメラに呼びらされた。

ガメラ『悪いな2人とも』

光太郎「いや、いいよ。それより大事な話でなんだい」

ガメラ『あの少女のことだ』

ピカチュウ『ランのこと?』

ガメラ『あの少女はただの子供じゃない』

ピカチュウ『うん!ランは人間とポケモンのハーフなんだ』

光太郎「え?そうなのかい?」

ピカチュウ『うん!しかもランの父親はロケット団のボスサカキなんだよ』

光太郎「ロケット団で確かこの間の連中だよね。そいつらのボスがランちゃんの父親なのかい?」

ピカチュウ『うん!初めて知った時ランはかなりショックで家出してしまったんだ』

光太郎「あのランちゃんが家出を?」

ピカチュウ『あいつらと違ってロケット団のボスはポケモンを金儲けの道具としか見てないだ。うわさだとロケット団はシヨツカーと同盟を結んだらしいよ』

光太郎「となるとランちゃんの世界でシヨツカーが現れたのもロケット団が関係してる」

ガメラ『なるほどなシヨツカーがなぜあの子を狙うのかはわからな
いだが今回シヨツカーは同盟の宇宙海賊まで地球に呼んだ。気を付

ける2人とも俺のかが正しいければ宇宙海賊を倒せばシヨツカーは本格的に動き出す。だからしつかりあの子を守れよ」

光太郎「ああ、わかつている」

ピカチュウ『もちろんだよ』

光太郎とピカチュウは改めてシヨツカーからランを守ることを誓うのだった。

③【昭和ライダープリキュアの世界へ】

ここは仮面ライダーの世界。ある日10人の仮面ライダーはある場所に集められた。

本郷「みんな来たか？」

一文字「本郷、久しぶりだな」

風見「クライシスの戦い以来ですね」

結城「本郷さん達もですか？」

神「俺も不思議な声に呼ばれた」

アマゾン「俺もそうだ」

城「だが助けを求められたなら無視できない」

筑波「それが俺達仮面ライダーだ」

沖「ああ、そうだな」

村雨「あとは光太郎がいないがどうなっている？」

昭和ライダー達が話していると女神ピンクが現れた。

ピンク「仮面ライダーの皆さんありがとうございます」

本郷「あなたが俺達を呼んだのか？」

ピンク「はい！私は女神ピンク、貴方達から言うとパラレルワールドの女神です」

結城「パラレルワールド？つまりあなたは別の世界から来たと？」

本郷「それでその別の世界の女神が俺達に何を？」

ピンク「今、私のいる世界にはシヨツカーがあらわれました」

昭和ライダー「!!!」

一文字「本当なのか？詳しく聞かせてくれ？」

ピンクは全てを話した。ランのいるポケモンの世界で起こったこと。光太郎がプリキュアと共にランを守る為に戦っていること。

本郷「俺達の知らない所でそんなことが」

一文字「もつと早くショツカーの復活に気づいていたらその子の家族を守れたのに」

ピンク「今、ショツカーと同盟を結んだ宇宙海賊が光太郎とプリキュアの元に1000体のショツカー怪人を送りこみ更に瀕死のガメラにも怪獣を送りこようとしています」

本郷「わかりました、女神ピンク俺達も貴方達の世界に行つてショツカーと戦います。いくぞ！みんな、光太郎とプリキュアを助けにいくぞ」

昭和ライダー「おう！」

こうして昭和ライダーはプリキュアの世界へ向かった

④【実はこんな人達もミラクルライトをふっていた】

女神ピンクの呼び掛けによりミラクルライトは世界中に散らばった。その中にはプリキュアとは別の世界にとんだものもあった。

ここはプリキュアの世界とは別の世界、ある都の大きな建物にある人物達が集まっていた。

悟空「なあ、ビルス様オラもあの世界へ行つて戦つたらダメなのか？」

ビルス「それはできない」

クリリン「何ですか？」

ウイス「何者かによつてあちらの世界へ行けなくなっているです」
ビルス「俺だつて今すぐプリキュアの世界へ行つてショツカーとザノンを破壊したいさ」

悟飯「ビルス様なぜそこまでプリキュアの世界にこだわるのですか？」

ウイス「プリキュアの世界ではなくビルス様がこだわっているのはあのランという少女です」

ブルマ「え？あの女の子ですか？」

ウイス「はい！実は彼女の母親の女神プラチナ様はビルス様の奥さんなのです。つまりあの少女は父親は違いの娘ということですよ」

クリリン「え？ビルス様の義娘なんですか？」

ビルス「ウイス！よけなことを言うな！とにかくお前らこのミラクルライトをさっさとふれ！出ないと全員破壊するぞ！（怒）」

悟空「わかっただから怒るなビルス様。ほらベジータオメエも振れよ」

ベジータ「まで！カカロット！俺にこれを振れというのか？」

悟空「あたりめえだろ！ほらフリーザも」

フリーザ「待つてください孫悟空さん、私に、この宇宙の帝王フリーザ様にこのペンライトを振れというのですか？」

悟空「だってしよがねえだろ！オラ達にあっちの世界に行けねえからそれにあの宇宙海賊が勝ちましたら宇宙の帝王を出し抜かれたことになるぞ。それでもいいのか？」

フリーザ「良いでしょ。あんなどこの馬の骨かわからない宇宙海賊にこけにされるのはゴメンですからね。それにあなたには力の大会の時の借りを反させてもらいます」

ベジータ「いいか！カカロット今回だけだからな」

悟空「ああ、サンキュー！ベジータ、フリーザ」

ビルス「(何とか誤魔化したあの世界に行ってピンクの奴に余計なことを言われたくないしな。プラチナの奴と実はキャバクラで出会って恋に落ちたなんてこいつらに絶対知られたくない。それにしてもプラチナもう10年も行方不明だけでも彼女に何かあった場合は俺がそいつらを破壊してやる。まあ今は俺とプラチナのバカ息子にあいつの搜索をまかせよう)」

こうしてドラゴンボールの世界の悟空達もミラクルライトを振ったのだった。

ここはある森の中にあるツリーハウスにもある人物達が集まっていた。

鬼太郎「父さん、僕達も力を貸しましょう」

目玉「ふむ、そうじゃな女神ピンク様に色々お世話になっているか

らの」

砂かけ「ワシらも力を貸すぞ！こら！そこの酔っぱらいさつさと振れ！（怒）」

子なき「あと一杯だけ飲ませてくれ」

一反「とにかくこれ振るばい」

ぬりかべ「俺も振る」

猫娘「ほら、あんたもさつさと振りなさい（怒）」

ねずみ男「いてて、わかった振りますからひっかくな」

鬼太郎「みんなありがとう」

目玉「うむ、今度女神神殿の温泉に久しぶりに行こうかの」

鬼太郎「そうですね父さん」

ゲゲゲの森に住む鬼太郎達もミラクルライトを振るのだった。

ここは地球から遙か彼方にある星。

ウルトラマンキング「みななもの、われわれウルトラ戦士の力もガメラに送るぞ」

ウルトラ戦士「おおく」

ウルトラマン「ガメラ、仮面ライダーとプリキュアを助けてやってくれ頼んだぞ！だがゼットンには強敵だ気をつけろ！」

ウルトラマンゼロ「親父、レオ、あの奏太と誠司で奴俺達の力をうまく使ったな」

ウルトラセブン「うむ、だがまだまだ調整が必要みたいだ」

ウルトラマンレオ「ああ、そうだな誠司君、そのレオドライブには私の力が込められている。その力で君の大切な人を守るんだ」

ウルトラマンゼロ「奏太！お前も俺の力がこもったゼロドライブで大事なものを守れよ！」

光の国のウルトラマン達もミラクルライトを振った。

ここは仮面ライダーなどのヒーロー達のいる世界。荒野に5色の戦士達が集まっていた。

アカレンジャー「我々もスーパー戦隊も仮面ライダーとプリキュアとガメラに力を貸すぞ！」

レッドファルコン「ガメラ！仮面ライダーとプリキュアを頼むぞ」

！」

チエンジドラゴン「そして子供達とあの少女を助けてやってくれ」
ファイブレット「頼んだぞ！ガメラ」

5色の戦士スーパー戦隊もミラクルライトを振ったのだった。